

わたしの生き立ち そして 茨城への思い

上月りょうすけ

●幼少時代

◆ 出身はどちらですか。子どもの頃の思い出というと。

上月 1962(昭和37)年に兵庫県神戸市で小さな写真製版業を営む両親の長男として生まれました。

写真製版というのは、印刷の前段階の作業で、神戸新聞社の下請けもやっていました。2010年に茨城空港から神戸線が初めて飛んだとき、私も第1便に乗って現地で宣伝してきましたが、それも神戸新聞はじめ様々なメディアで取り上げてくれました。今でも印刷屋や製版屋さんに行くと、あのインクのにおいが思い出されて懐かしい感じがします。

小学低学年の頃、父親に連れられて得意先の印刷屋さん回りをしました。父親に「『まいど』といってお前が先に入つていけ」といわれてお店に入って行くのですが、恥ずかしい思いを胸に押し込んで、いざ事務所に入ってみると、おじさんがニコニコしてお小遣いをくれた

りしました。本当に小さなことですが、子どもにとってはちょっと勇気のいることで、そうした訓練が今も生きているような気がします。



小学生時代 ボーイスカウトにて(真ん中:本人)

●柔道で鍛錬

◆ 柔道はいつから始めたのですか。受験勉強も大変だったのでは。

上月 体を鍛えようと、中学から始めました。ところで灘校の創設者は柔道の嘉納治五郎先生で、講道館と同じ「精力善用」「自他共栄」というご自身の書が掲げられ、建学の精神を今も伝えます。その後は変わったようですが、当時は県総体の柔道は必ず灘校を会場にしていて、灘校の主将として宣誓もしました。

柔道に打ち込むあまり、勉強は少しおろそかになってしまい、大学受験は1年浪人しました。その当時としては大きな挫折で、ショックも大きかった。でも、浪人期間中、ずっと手紙を書いて励ましてくれる同級生もいて、友人のありがたさをつくづく感じました。

また、浪人後の合格発表のとき、私は風邪をこじらせ東京に見に行けなくて、神戸で寝ていました。そうしたら、現役合格していた一番の親友が、校門の一番前にいて、掲示と同時に一直線に走って見に行ってくれたんです。携帯電話のなかった時代でしたので、真っ先に一番近い公衆電話に駆け込み、「日本で一番早い合格通知だぞ。自分が通った去年の何倍もうれしいわ！」と合格の知らせをくれたときは、本当に嬉しかった。中学・高校の校風が、互助精神というか、自分だけが上にいけばいいというのではなく、互いに引っ張り上げる雰囲気に包まれています。



高校生時代 柔道の大会にて

●大学生活

◆ 東京大学法学部に入って、どんな学生生活を送りましたか。当時から国家公務員を目指していたのですか。

上月 大学では法律学の勉強も一生懸命にやりましたが、あわせて体育会アーチェリー部に所属しました。当初は同好会でしたが、出していた申請が認められ体育会となり、初代の主将を務めました。どうせやるなら、大学を代表して他校と戦って結果を出したいと考えて

いました。柔道は屋内スポーツだったので、屋外スポーツに興味があつたのです。そこで大学から始めてもハンディがなくて、個人で練習ができるアーチェリーを選びました。

部は、関東学生アーチェリー連盟に加盟して、連盟の副委員長も務めました。そこで他大学の人たちと交流できて自分自身の横幅が広がった気がします。

就職活動に関しては、実は4年生のとき公務員試験をいい加減に受けてしまって、結局通りませんでした。自分の中でそれが割り切れないで、あえて留年を選びました。親に本当に迷惑をかけてしまったと反省していますが。1年後、今度は公務員試験に通り、企業にも内定をいただきましたが、もし企業に行っていたら、そこで心底一生懸命やっていたでしょう。今ある場所で与えられた仕事に全力で取り組んでこそ、その後の人生が開けるのだと思います。



大学生時代 アーチェリーの大会にて(真ん中:本人)

●自治省入り

◆ 自治省に入って、その後の公務員生活はいかがでしたか。茨城県の印象は。

上月 日本全国いろいろなところに行って、いろいろな人と出会い、一緒に何かを創りたいという思いがありました。自治省は、人生の半分を地方で過ごし、地方と国を行き来して現場の実情をつぶさに見て、机上の議論にとらわれがちな霞ヶ関の他省庁と政策論議を戦わせます。毛色が少し違っていて、私はそこに強い魅力を感じていました。

茨城県には2005年4月に総務部長に就任して2012年6月末に副知

事を退任するまで7年3ヶ月在籍しました。

振り返ると、非常にヘビーな懸案が多かったと思います。財政再建、出先機関の見直し、住宅供給公社の破綻処理、東日本大震災の被災時の対応から復旧・復興に至るまで、さまざまな課題に全力で取り組んできました。

初めは茨城県に対して、非常に東京に近く、災害が少ないといった印象でした。また、鹿島の臨海重工業地帯も東京から100キロのところにありますし、つくばなどもここまでポテンシャルがあるとは思っていませんでした。でも1年、2年と仕事するうちに、これはすごいところだと見方が大きく変わりました。

災害が少ないという印象は、2011年3月の東日本大震災で一変しました。実は1995年の阪神・淡路大震災のとき、実家が大きな被害に遭いました。ですから、被災者目線というか、県民目線を忘れないよう常に心掛け精一杯頑張ったつもりです。

●県民目線で

◆ 県民目線で県の発展のために尽力されたということですが、今は自民党参議院茨城第一支部長をなさっています。行政畠から今度は政治の世界へ転身しようと決断したのは。

上月 役人では決められない問題が多くなってきたと感じています。それは日本の未来に向けてとても重要な時期にさしかかっていることを意味しています。縦割り思考では限界があり、政治家の役割がさらに重要になってきました。

茨城の発展可能性は、茨城のためだけにあるのではなく、日本をけん引するのに役立てる必要が大いにあると確信しています。例えば大リーグのイチローや松井のような才能ある選手は、厳しい努力の裏づけによって、ここぞというときに決められるチームを引っ張っていく打者となりました。私は、日本にとって茨城はそういう位置付けにあります、責務があると思います。

逆にいって、茨城が発展しないで日本が発展するのは、なかなか難しい。特につくばで、研究機関、行政、地元企業の、人間的な泥臭い、汗をかいて懸命にみんなで何かを創っていく関係が強まっていくべきないと感じます。そのことによって最先端科学技術を伸ばし、併

せて地域産業を活性化することをセットでやる。また、もうひとつの大切な課題として、「幸せな高齢社会」をつくっていく。そうしないと日本の展望は開けません。

昨年はiPS細胞がノーベル賞を受賞しました。それは素晴らしいことですが、ノーベル賞を取った技術の産業化を他国に取られてしまつては大変な損失です。産業化に当たって地域産業のすそ野にうまくつなげ、雇用の場を創っていくことをセットでやっていくのは茨城が一番適していると思います。

つくばがあり、東京に近い。技術力の高い日立製作所の関連会社が工場を連ねる。重工業地帯もある。東海村の J-PARC もあります。そういう集積が物理的に近場にあって、セットでやれるのは、とても重要です。「危機突破内閣」のいわゆる「3本の矢」の三つ目の成長戦略で見た場合、茨城は本当に主役にならないといけません。また、水戸をはじめ県北部の活性化なしに茨城は発展できません。文化・歴史の資源、新たなイベントなどをフルに活かして国内外の観光客を積極的に呼び込んでいくことも重要です。茨城のためだけというのではなく、茨城が良くなることが日本の発展につながるということがあります。

●茨城県の潜在力

◆ 茨城が日本の発展のためのリーディング県になる潜在力を十二分に秘めている、それを引き出したいということですね。

上月 ポテンシャル(潜在力)と言いますが、ポテンシャルは開花させなければ意味がないし、そうでないと日本が良くならない。私は、日本は今、本当に危機的な状況にあると思っています。まだ昭和の遺産で食っているけれども、今生まれてきている子どもたちが働き始め、結婚を考え始める20年後のことを考えなければなりません。滝つぼに落ちていくのか、もう一度引き返して川の上流まで上っていくのか大事な岐路に立たされているのです。

金融と経済対策に加えて、3本の矢の中で最も重要な「成長戦略」。それに貢献できるのは、茨城しかないのではないでしょうか。茨城に骨を埋め、茨城の発展、そしてそれを通じ日本の発展に少しでも貢献することで生きた証を立てたいと思っています。

(茨城新聞掲載のインタビューを基に構成しました。)